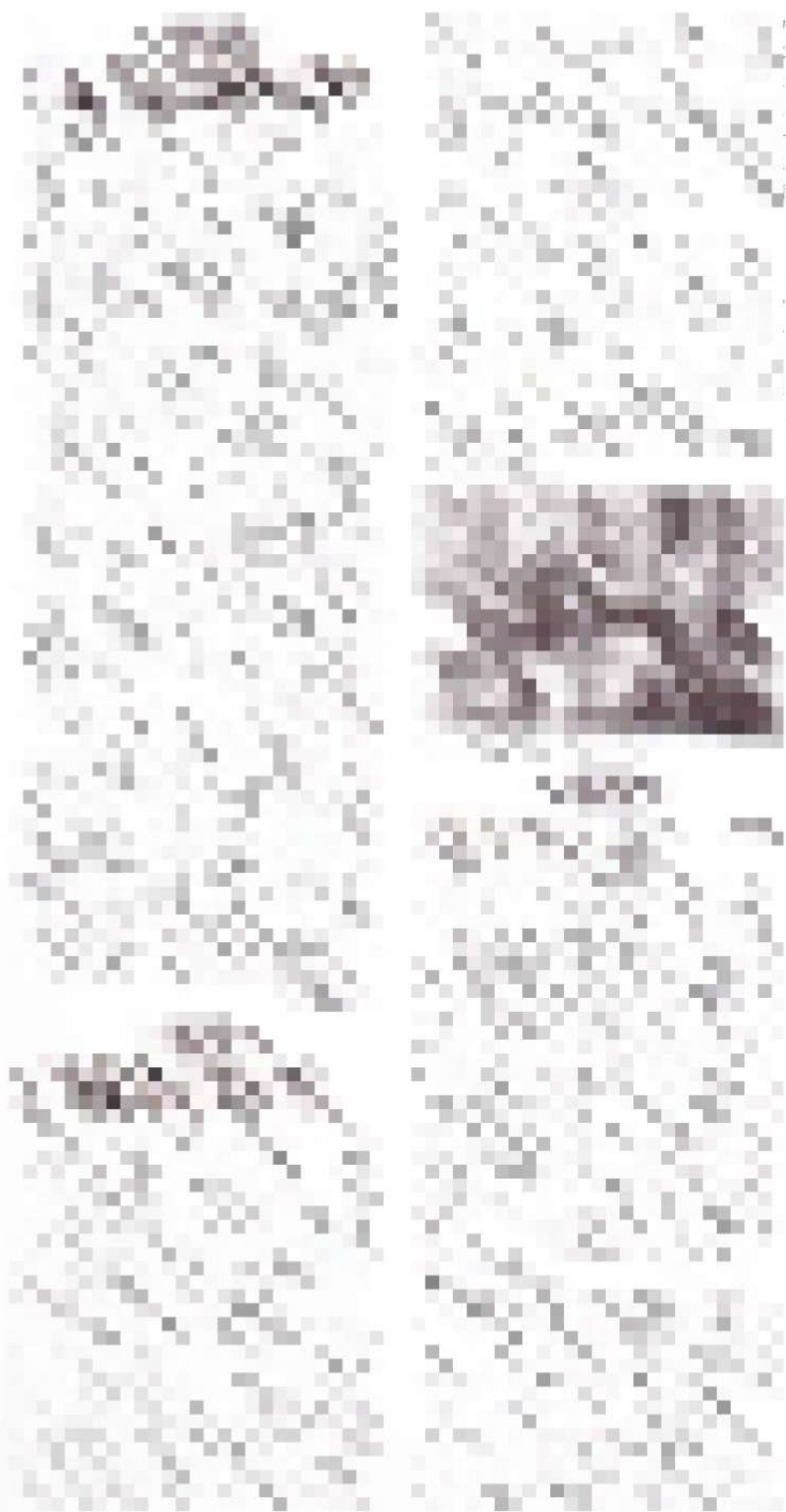


Scramble Shot



opera

満席の劇場のような歓声、ハンブルク州立歌劇場の《ホフマン物語》

プレミエ前から注目されていたハンブルク州立歌劇場のオッフェンバック《ホフマン物語》を9月19日に所見した。ドイツでもワクチン接種・罹患・陰性証明書の提示が定着しているが、それでもハンブルク州の規定で収容人数を約半分に抑えなければならない状況だ。しかし、その半数の観客たちが、満席の劇場のような歓声を送る成功を収めた。男性合唱の大半はバルコニー席から声のみの出演だったが、劇場中を包み込む聴き慣れたメロディはいっしょに歌いたくなるステレオ効果を与えた(後日合唱団から陽性反応者が出たが、幸い千秋楽中止には追い込まれずに済んだ)。

この日、エルプフィルハーモニー・ハンブルクでのマチネのオーケストラ公演も指揮したケント・ナガノは疲れも見せず、カットを最小限にし、3時間ほどの演奏を最後まで信念をもって振りきった。テンポがゆっくりすぎる部分が数カ所あったが、総じて効果的な指揮であった。

そして今回の主演バンジャマン・ベルネームは、役デビューとは思えない理想的なホフマンだった。この役を歌いきることにストレスを感じるテノールは多いが、彼の声と歌唱力、フレージングで聴くと、すべてが自然に聴こえる。また、4人の恋人役全部をこなせるソプラノを見つけるのもむずかしいが、オルガ・ベレチャッコは細目の声ながら軽々と上手に歌い分けた。ミュージズとニクラウスのアンジェラ・ブラウワーも主演二人にまったくひけを取らない歌唱力で音楽を支え、悪役4役のルカ・ピサローニも個性の異なる悪を好演した。

ダニエレ・フィンツィ・バスカの演出はオルゴールのなかで踊る人形のオランピア、標本に囲まれた囚われの身のはかない蝶のアントニア、ジュリエッタのシーンの鏡に映ったホロスコープなど視覚的印象に秀でていた。

ARTE Concertでは10月3日から90日間、ドイツグラモフォン・コンサートホールでも10月19日から2日間オンライン配信されるほか、Mezzo、ARTE TV、日本では12月にNHKでテ

レビ放映されるので、視聴をおすすめしたい。
(中 東生)



人形のオランピア (中央上) はオルゴールのなかで踊った
© Monika Ritterhaus

